

ダンテ『神曲』の神学的背景とその普遍性：「煉獄篇」を中心に

著者	秋山 学
雑誌名	筑波大学地域研究
巻	39
ページ	71-90
発行年	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00151114

ダンテ『神曲』の神学的背景とその普遍性 —「煉獄篇」を中心に—

Theological Background and Universality of *Divine Comedy* by Dante Alighieri: In Special Relation to Its *Purgatory*

秋山 学
AKIYAMA Manabu

Abstract

Divine Comedy of Dante Alighieri (1265-1321) is chiefly known to us for its worldwide literary fame, and is generally considered to be characterized by its medieval view of the western world. However, when we pay attention to theological background of the *Divine Comedy*, especially of its *Purgatory*, we can recognize that the theological thought of Dante not only represents the medieval western world view, but also holds true in the Byzantine tradition, which has been maintained in the Greek Catholic Church in the Central Europe. We can explain this mystery if we take notice of the history of two Councils: in the Second Council of Lyon (1274), the same theological issues were discussed as in the later Council of Ferrara-Florence (1438-39). The issue of the “Purgatory” or the “Purifying Fire of the Purgatory” was already discussed in the Second Council of Lyon, and the delegates from the Byzantine Empire, which was ruled then by the emperor Michael VIII Palaeologus (1261-82), reached an agreement on this issue. Although the agreement in the later Council of Ferrara-Florence was invalidated by the Orthodox Church soon after that Council, a minor party of the Eastern Church, chiefly found in the Central Europe (the Greek Catholic Church), was true to this agreement. So since we can find the same theological view both in Dante and in the Greek Catholic Church, we can surmise that Dante was acquainted with the issues discussed in the Second Council of Lyon. One of the chief leaders of the Greek delegates in the Council of Ferrara-Florence was (later) Cardinal Bessarion (1403-72). He donated main important manuscripts of the Greek Classics to the Library of Saint Mark in Venice, and these manuscripts have greatly benefited classical scholars. Thus, both the Greek Catholic Church and the Classical Studies have their origins from Bessarion. We can say that all of the endeavors of Bessarion for the union between the Western and the Eastern Churches were made for the purpose of revalidation of the agreement made in the Second Council of Lyon. So in these points of view, too, Dante will be counted as the “sixth” (Inf. 4,102) in the line of the divine poets starting from Homer, whose best manuscript (Venetus 454: “A” of the *Iliad*) is found in the Library of Saint Mark in Venice.

Key Words : Dante Alighieri, Purgatory, Bessarion, the Second Council of Lyon, Greek Catholic Church

キーワード：ダンテ・アリギエリ、煉獄、ベッサリオン、第2リヨン公会議、ギリシア・カトリック教会

I. 序

ダンテ（1265-1321）による『神曲』は、西洋文学随一の古典作品として名高く、「盛期中世の学知と信仰の総体を最高度に詩的な表現へと集約し」、「中世キリスト教の信仰世界の全体」を「力強く描」いた傑作（リーゼンフーバー 2003：383-384）、すなわち西欧中世の世界観を典型的に示す作品であるという評価が慣例となってきた。西欧世界にギリシア古典文学作品が伝わったのは、ほぼ14世紀半ば以降に本格化する東方正教修道僧たちの渡来に伴った古典作品の手写本伝播による。したがって1300年の世界を舞台とする『神曲』は、確かにギリシア古典作品の原典に基づく内容とは無縁である。『神曲』に登場するオデュッセウスの遍歴すら、『オデュッセイア』の原典に沿ったかたちでの内容からは程遠い（地獄篇第26歌90行以下）。

ところで、この『神曲』にアプローチする方法としては、さまざまなあり方が考えられよう。わが国ではこれまで、主としてイタリア文学研究者によってその研究と解説が行われてきた。だがこの『神曲』は、イタリア文学やイタリア史の知識よりも、西洋古典や聖書、神学や教会史、あるいは当時の政治思想や自然科学に関する深い知識を本質的に必要とし、いわば「百科全書」の観を呈する。

本稿では、『神曲』を味読するために、同時代の背景にある神学に照らし、古典学的ないし神学的作品の一つとしてこの作品を位置づけ、いかなる世界が拓けるかを考えてみたい。特に神学的な背景に照らして『神曲』を読むとき、実はこの作品が、東方ギリシア・ビザンティン教会の神学をも十全に受容した構造と内実を備えていることが次第に明らかとなってくる。したがって冒頭で述べたような、純然たる西欧世界の中世的世界観を示す「ゴシック的」な作品とは一風異なった様相を呈するに至るのである。このことを立証するために、本稿では『神曲』のうち、特に第2部に相当する煉獄篇にスポットライトを当ててみたいと思う。

II. 『神曲』と第2リヨン公会議

ところで、学問としてのいわゆる「西洋古典学」は、枢機卿ベッサリオン（1403-72）にその起点を有すると言える。素材としてのギリシア古典の写本を西側世界に提供したのが、ギリシア正教のニカリア司教からローマ・カトリックに転じ、後に枢機卿にまで挙げられたベッサリオンその人だったからである。ベッサリオンが収集した古典ギリシア文学・哲学・歴史学等々の写本類は、ヴェネツィアのサン・マルコ修道院付設図書館に寄贈され、古典学者たちに供せられて今日に至っている。その中には、ホメロス『イリアス』を収める10世紀の写本「ヴェネトウス454」(A) も含まれる。

一方、ベッサリオンが深く関与し主導役の一人となったのが、1438年から翌年にかけて開催された東西教会合同のための教会会議「フェッラーラ・フィレンツェ公会議」である。ベッサリオンは合同派の旗手であったが、結果的にこの一派は、オスマン・トルコに抗するために西側からの援軍を俟ちたいギリシア正教・ビザンティン使節団の説得にひとまず成功し、公会議は、聖霊の発出・煉獄・ローマ教皇の首位権といった教義上の論点をめぐり、西側の教義を正統とすることで教会合同を決議し、閉幕する。ただ東側の正教関係者たちにとってこの議決は、政治的状況の影響による西側への妥協であると映ったため、使節団の帰国後、決議は激しい怒りとともに破棄され、ベッサリオンらは少数派に転ずる。もっとも古典学者ウィルソンが喝破するように(Reynolds & Wilson 1991: 150)、後に成立する「ユニアト教会」すなわち「ギリシア・カトリック教会」の共同体は、この公会議における教会合同の決議に成立の立脚点を有している。その意味で彼らは、ベッサリオンの足跡に倣う人々であると言える。

かくして、「ギリシア・カトリック教会」と西洋古典学とは、ともにベッサリオンに発するという点で、自らの成立の軌を一にしている。筆者は西洋古典学の研究から出発したが、その傍ら夙にビザンティン典礼の内的経験を切望し、その結果ギリシア・カトリック教会に出会ったのであるが(秋山2010: ix)、いま思い返してみれば、一見まったく没交渉にも思えるこれら二方向のベクトルは、ベッサリオンに起点を発するという点で共通性を有していたのである。

さて上述のように、ギリシア古典作品が西欧世界に伝播するためには、作品そのものを収めた手写本が物的に西欧世界に伝えられる必要があったわけであるが、さらに作品が内容理解を伴ったかたちで真に伝播するには、西欧世界にギリシア語教育のための機関とシステムが確立される必要があった。この役割を果たしたのは、渡来ビザンティン貴族の一人、マヌエル・クリュソロラス(1350-1415)であり、クリュソロラスは、フィレンツェで1397年から1400年までギリシア語を教えている。1397年、彼のためにフィレンツェにギリシア学院を設立したのは、コルッチョ・サルターティ(1331-1406)であった。クリュソロラスの門下生としては、聖大バシレイオス著『若人に』のラテン語訳(1402/03)により知られるレオナルド・ブルーニ(1370-1444)や(Naldini²1990: 59)、1403年クリュソロラスがコンスタンティノポリスに戻る際、自らに同行させたグアリーノ・ダ・ヴェローナ(1374-1460)のほか、カマルドリ修道会士の一人、福者アンブロージョ・トラヴェルサーリ(1386-1439)らがいる。このトラヴェルサーリが、フェッラーラ・フィレンツェ公会議において、関連のギリシア語教会文献をラテン語に、あるいはローマ教会側のラテン語資料をギリシア語に訳す任を負った人物である。公会議に至るまでに、ブルーニたちの場合をも含め、クリュソロラスがフィレンツェにギリシア語教育をもたらしてから約40年が経過し、彼らフィレンツェ人の知識はギリシア教父たちの神学にまで深く及んでいたものと推測される。

ところで、通常はほとんど注目されることのない点であるが、東西教会合同のための協議が行われたのは、フェッラーラ・フィレンツェ公会議が初めてのことはない。同公会議に先立つこと約150年以上以前の1274年、第2リヨン公会議が開催されている。そしてこの第2リヨン公会議においても、フェッラーラ・フィレンツェ公会議におけるのとはほぼ同じ論点について、すでに

議論が行われていた。それは上にも言及したように、「聖霊の発出」「煉獄」「ローマ教皇の首位権」の3点である。

このように、年代的にもダンテ自身が既知のものとしていた第2リヨン公会議において、すでに東西教会合同のための中心論点の一つとして「煉獄」が取り上げられ、論議がなされていた。これは、東方ギリシア教会には従来、「煉獄」という観念、ないし「煉獄における火による浄め」のイメージが希薄であったことを裏書きするものと思われる。しかしながら「浄めの火」の淵源は、遑って新約聖書のうちにも求めることができる (e.g., 1コリント3、15「その人は、火の中を潜り抜けて来た者のように救われる」；1ペテロ1、7「あなた方の信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりもはるかに尊く、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れをもたらす」)。したがって、ビザンティン思想家たちが何故「煉獄」の観念に親しまなかったのか、という問題を解明することは意義ある課題と言える。本稿では扱う暇がないが、私見によれば、この点にはビザンティン典礼の持つ現在終末論的特性が影響しているものと考えられる (Akiyama 2016 : 151-152)。

III. 煉獄篇の内容

周知のとおり、ダンテの『神曲』は、順に「地獄篇」「煉獄篇」「天国篇」の3部立てによりその全体が構成されている。『神曲』は、従来しばしばトマス・アクィナス (1225-1274) による『神学大全』がその神学的基盤を成していると指摘されてきた。しかしながらトマスは、ボナヴェントゥラ (1218-1274) と異なり、上述した第2リヨン公会議への参席を果たすことができなかった。第2リヨン公会議は、1274年の5月7日から7月17日まで開催され、その論題は東西教会合同のための神学的諸問題だったわけであるが、トマスはこの公会議に向かう途上、同年3月7日、ラティーナの近郊フォッサ・ヌオーヴァにあるベネディクト会サンタ・マリア修道院において客死している。したがって、『神曲』に対する第2リヨン公会議からの影響は、トマスの著作からの『神曲』への影響とは切り離して考えることができる。本稿冒頭において、『神曲』では西欧中世における世界観が支配的のように映る旨を記したが、この意味で純粋に西欧世界の神学的産物だと言えるのは、トマスの『神学大全』の方である。つまり『神学大全』においては、ビザンティン神学に関する知識は、偽ディオニュシオス・アレオパギタをめぐるものなど一部を除いて限定的にしか見られず、それは東西教会の合同という契機には基いていないのである。

『神曲』は、ダンテ自身が作品中に登場し、作中でダンテ自身が地獄から煉獄を経て天国に向かう旅の中で成長を遂げるというかたちで全篇が進行するが、このうち「煉獄」は「地獄」と「天国」の中間に現れる。時間経過で捉えるならば、ダンテが三界を経るこの旅は、彼が35歳のとき、すなわち1300年の4月7日 (木曜日) 夜から14日 (木曜日) の正午にかけて、つまり復活祭に先立つ聖週間のうち (事実上) 聖金曜日から次週 (「光の週」) の木曜日までの1週間のあいだに行われた、という想定の下に置かれている (岩倉ほか1985 : 55)。

場所の関係で言えば、地獄は「ふいご」状に地中に向けて深く掘りぬかれており、その掘りぬ

かれた分だけ、煉獄の山が南半球上の地表から突出している。その山の頂上(「地上の樂園」)は、地上のエルサレムの正反対側に位置するといった具合である(なお地獄へは「ふいご」の縁を伝わりながら降りてゆく格好になるため、地獄の入り口がエルサレムにあるわけではない)。

「地上の樂園」とは、かつてアダムとエヴァが『創世記』に描かれる「樂園」での生活を体験した場所に他ならないが、彼らが樂園追放に遭って以降、誰も歩み入ったことのない場所となっていた。この樂園は、7層の「環道」より成る「煉獄の山」の中で、さらなる最上層を形成する部分である。このほか「煉獄の山」を登り始める前に、「前煉獄」と呼ばれる部分が二段階の丘に分けて設定されている。以上の関係を、時間経過とともに表示してみよう(以下、原2014b: 500-627に基づく)。

・煉獄篇〈()内は第何歌であるかを示す〉

(1) 4月10日〔復活の日曜日〕早朝 (2) 同・日の出

〈前煉獄・第1丘〉

(3) 4月10日・午前6時

〈前煉獄・第2丘〉

(4) 4月10日・午前9時 (5) — (6) 同・正午

〈君主たちの溪谷〉

(7) 4月10日・日没前 (8) 同・日没後

〈煉獄・門〉

(9) 4月10日・午後9時前～4月11日夜明け前

〈煉獄の山・第1環道〉

(10) 4月11日(月曜日)・午前9時過ぎ (11) 同・午前中 (12) 同・真昼

〈煉獄の山・第2環道〉

(13) 4月11日・午後3時過ぎ (14) —

〈煉獄の山・第3環道〉

(15) 4月11日・午後3時～午後6時過ぎ (16) 同・午後6時半 (17) 同・日没～真夜中

〈煉獄の山・第4環道〉

(18) 4月11日・真夜中 (19) 4月12日(火曜日)・午前4時過ぎ

〈煉獄の山・第5環道〉

(20) 4月12日・午前中 (21) —

〈煉獄の山・第6環道〉

(22) 4月12日・午前11時 (23) — (24) —

〈煉獄の山・第7環道〉

(25) 4月12日・午後2時 (26) 同・午後5時前

〈地上の樂園〉

(27) 4月12日・午後6時～4月13日(水曜日)夜明け (28) 4月13日・朝 (29) —

(30) — (31) — (32) — (33) 4月13日・正午

かくして、煉獄篇の冒頭は復活祭・主日（4月10日）の早朝に、一方煉獄篇第28歌が4月13日・水曜日に該当し、同第33歌（および天国篇第1歌）が同じ4月13日（水曜日）正午に相当する。天国篇の末尾が14日（木曜日）であるとすれば、天国篇は1日のうちに終わられると考えられよう。煉獄における7つの「環道」は、（大罪に比して比較的軽微とされる）7つの小罪、すなわち順に高慢、嫉妬、憤怒、怠惰、貪欲、暴食、邪淫の罪をそれぞれ浄める場所とされている。

ここで確認しておきたいのは、

1. 煉獄篇が「復活の主日」の開始とともに始まるということ。すなわち「地獄」からの脱却こそ、「復活」に他ならないということ。
2. ダンテが煉獄の「環道」に入ると、聖週間次の1週間、すなわち「光の週」の経過とが、時間的に一致するように構成されているということ。すなわち、「光の週」の最初の2日間つまり「復活の月曜日」および「復活の火曜日」（Ivancsó 2000 : 164）の間に第1～第7環道が踏破されるということ。

の二点である。後ほど説明するように、ダンテは第2リヨン公会議に関する知識を通じて、すでにビザンティン典礼の細部にまである程度通じていたと考えられるが、ここでは、ダンテがビザンティン典礼に特徴的な「光の週」のうち、「復活の月曜日」「復活の火曜日」を煉獄の山での経過期間と一致させているという点に注目しておきたい。

IV. 第2リヨン公会議（1274年）における皇帝ミカエル・パライオロゴスの信仰告白

第2リヨン公会議は、教皇グレゴリウス10世（在位1271-1276）の主宰により開催され、教皇の首位権、煉獄、7つの秘跡を信仰箇条として含むものであった（イエディン1986 : 68）。ビザンティン皇帝ミカエル（8世）・パライオロゴス（在位1261-1282）は、1259年にニカイアで権力を掌握し、1261年にコンスタンティノポリスを奪還した人物であるが、リヨンにこの皇帝の総代として派遣されたのは、前コンスタンティノポリス総大司教のゲルマノス（II世、1222-1240）、ニカイア大司教テオファネス、ゲオルギオス・アクロポリテス（国務長官）、ニコラス・バナレトス（衣料部長）、ベッロアイオテス（通訳）、ゲオルギオス・ズィヌキであったという。信仰箇条の中の「煉獄」に関する条項には、デンツィンガー・シェーンメッツァー（DS）の資料集（Denzinger-Schönmetzer 1976 : 276-277）では「亡き者たちの運命について」という見出しが付されている（第856-858項）。以下に、皇帝ミカエル・パライオロゴスによるこの信仰告白を訳出する。

「第856項 たとえば真に痛悔する者たちが、痛悔に適う実りを、犯した罪・怠りについて満たす前に、愛のうちに亡くなったとしよう。彼らの靈魂は、浄めの罰ないし煉獄での罰によって、われわれの兄弟ヨハネス（フランチェスコ会士パラストロン）が説明したように、死後であっても浄められる。そしてこの類の罰を軽くする上で、彼らのために、生ける信徒たちの代

祷、すなわちミサでのいけにえ、祈り、慈悲、その他の敬虔心による勤めが有益である。それらは教会の定めに従えば、信徒たちにより、他の信徒たちのために為されるのが慣例である。

第857項 しかるに、聖なる洗礼を受けた後、まったく何らの染みをも蒙ることのなかった者たちの靈魂、また罪の染みを蒙った後、あるいは身体に留まった状態であれ、あるいは身体から解放された後であれ、それらから浄められた靈魂は、いずれも、間もなく天に受け入れられる。

第858項 ところが、あるいは単に原罪のためであっても、死に値する罪に堕ちている者たちの靈魂は、間もなく地獄に降る。ただ彼らは、異なった罰によって罰せられるべきである。かのローマ教会は、次の事を力強く信じかつ力強く断言する。すなわち、以上にもかかわらず、裁きの日にあっては、すべての人々がキリストによる裁判の席に、自らの身体とともに現れ、自分自身の行為について申し開きをすることになるということをする。

この信仰告白のうち、第856項の「代祷」に関する一節に対しては、本稿において後ほど引用する「カテキズム」の§ 1032が「参照せよ」との指示を出している。代祷については改めて詳しく検討するが、「死者のために生者が代わって祈祷・奉仕をすること」といった意味での「代祷」*suffragium*の観念は、このように1274年のリヨン公会議において明確にその有効性が語られ、煉獄を特徴づける際に最もよく用いられる関連語彙として、20世紀末に出版されたカテキズムのうちにも受け継がれることになる。

またダンテが「地獄篇」の中で、キリスト到来以前の偉大な詩人たち、ないし紀元後の人間であっても洗礼を受けずに亡くなった幼児たちの霊に関して、これを「リンボ」に置いているのは(第4歌)、上に引いた「あるいは単に原罪のためであっても、死に値する罪に堕ちている者たちの靈魂は、間もなく地獄に降る」という一節に忠実な理解であることがわかる。すなわち年代・内容の両面から推して、やはりダンテはこの第2リヨン公会議をよく理解していたと考えられる。ダンテもすでに知っていたこの第2リヨン公会議を通じて、東方諸教会ならびに東方の者たちにも、親しさに関してはどうあれ、この「煉獄」の観念が知られることになったと考えられよう。思うに、第2リヨン公会議からフェッラーラ・フィレンツェ公会議に至るほぼ150年余りの期間は、問題と典拠の精緻化に努力が払われたに過ぎず、観念上の本質には何ら変化がなかったと言えるだろう。

V. 煉獄とは

さて、地獄篇・天国篇とともに3部構成を成す『神曲』の中で、煉獄篇の構成はそれほど単純ではない。上に簡単に表示したように、第9歌の途中までは「前煉獄」*Antipurgatorio*と呼ばれる域での展開である。同歌76行に「門」*porta*が描かれ、これが正真正銘の煉獄(の山)の門への到着を表している。一方第28歌25行には「河」*rio*が登場するが、これは煉獄の山の頂を成す「地上の樂園」を前後から画す二つの河、すなわちレーテとエウノエのうち、まず前者を表している。一方後者エウノエは第33歌127行に現れる。ダンテはこれら二つの河の水を飲み、前者ではまず煉獄界までの穢れを洗い、後者では天国界に向かうための準備を果たすのである。

かくして、煉獄篇のうち第9歌途上から第28歌前半までが、狭義における煉獄界での展開ということになる。この「煉獄」では、大罪ではない罪すなわち小罪を、南半球を舞台とした世界での浄化・贖罪を通じて一つずつ滅却してゆくというプロセスが辿られる。ダンテ自身の額には7つの「P」の字、すなわち「罪」peccatumが刻まれるが(第9歌112行)、煉獄の山を登りつつ、ダンテはこのPの字を一つずつ消してゆくのである。なお第27歌64行目からは、地上の楽園への登攀に先立つ段階を経ることになるため、厳密には「煉獄の山」は煉獄篇第27歌第63行目まで、ということになる。

ところで「煉獄」とは一体何であろうか。講談社学術文庫版・原基晶氏の解説によれば、「煉獄」という概念は1150年代以降に出てきた観念であって、煉獄という言葉は聖書にはないとされている(原2014b:7)。しかしながら上述のように、「煉獄の火」に該当するものに関する記載は、すでに新約聖書のうちに認めることができる。

現代におけるカトリック教会の規範的な教義解説書『カトリック教会のカテキズム』(略称CCE; 1997)には、「煉獄」を索引で引くなら§1030~§1032、§1472の計4項が挙がり、そのほか「聖徒たちの交わり」の項目を参照せよとの注記がある。「聖徒たちの交わり」は、「痛悔もしくは和解の秘跡」についての項目のうち「贖宥(ないし免償)」(indulgentia)という下位項のもとに記され、§1472もそのうちに含まれている。一方、先に見た「代祷」(suffragium)という語彙もラテン語版カテキズムのインデックスには挙がっていて、そこには§958、§1032、§1055、§1684~§1690といった項目が見える。後ほど、これらの項目を中心に検討を加えることにしよう。

VI. カテキズムより

まず、同書§1030にはこう記されている。「神の恩寵と友愛のうちにありながら、不完全な形でしか浄められずに亡くなった者たちは、永遠なる救いを確信してはいても、自らの死後、浄めを経験することになる。天国での歓びのうちに入るために必要な聖性を獲得するためである」。

次の§1031にはこう記されている。「教会は、選ばれた者たちに対するこの最終的な浄めを<煉獄>と呼んでいる。これは、罪に定められた者たちに対する罰とは明確に区別されたものである。教会が、煉獄に関わる信仰教義を定式化したのは、特にフィレンツェ公会議(1439-1445)、およびトレント公会議(1545-1563)であった。教会の伝承は、いくつかの聖書本文(e.g. 1コリント3、15; 1ペトロ1、7)を参照しつつ、煉獄における(浄めの)火について語っている」。

これに続き、教父からの引用として、聖大グレゴリウス(540-604)『対話』4、41「死後に煉獄の火があるか否か」が挙げられている。

「ある種の軽微な罪に関しては、裁きの前に煉獄の火があると信じるべきである。なぜなら真理が次のように述べているからである。<人の子に対する冒瀆は赦される。しかし、聖霊に対する冒瀆は、この世にあっても、来たるべき世にあっても赦されることはない>(マタイ12、32)。この文章からは<ある種の罪はこの世において、だが別の罪は来たるべき世において赦され得

る>と考えられよう」。

教皇大グレゴリウスは、ビザンティン典礼で四旬節中に用いられる「グレゴリウス典礼」（いわゆる先備聖体祭儀）の起草者として東方世界にも知られており（秋山1999：47-57）、彼のコンスタンティノポリス滞在も長期間にわたったことから、ビザンティン神学に精通していたものと筆者は考えている（Akiyama 2016：563-574）。

続いて§1032である。「この教義は、死者のための祈りの慣習にも基づく。この祈りについては、すでに聖書がこう述べている。＜（ユダス・マカバイオスは、）死者が罪から解かれるように、彼らのために贖いの生贄を捧げたのである＞（2マカ¹ 12、45（46））。それゆえ教会は、初代教会の頃から死者たちに対する記念を尊び、彼らのために代祷、とりわけ聖体祭儀における生贄を捧げてきた。それは死者たちが浄められ、祝せられたかたちで神を見ることに至りうるためである」。

この後「教会はさらに、死者のための寄進、贖宥、痛悔の業をも勧めている」とあり、ここにヨハネス・クリュソストモスからの引用が見られるが、これは上記引用中の「代祷」に関わることであるので、後の論及に委ねる。

次いで§1472であるが、これは贖宥についての項目である。

「罪に対する罰：この教義およびこの教会の慣行を理解するためには、罪が二つの結果をもたらすということを知悉せねばならない。

1）大罪はわれわれを神との交わりから引き離し、かくしてわれわれを、永遠の生命に与ることのできない者とする。この永遠の生命が奪い取られることは＜罪による永遠の罰＞と呼ばれる。

2）他方、いかなる罪であれ、それが赦され得るものであっても、罪は被造物に病的な感情を伴わせるものであり、この感情は、この世においてであれ死後においてであれ、浄めを必要とする。この浄めは、罪に対する＜一時的な罰＞と呼ばれるものから解放するものである。これら二つの罰は、神からいわば非本質的に課せられる報いと理解されるべきではない。むしろ、いわば罪の本性そのものから出で来たるものである。燃えるような愛から発せられる回心は、罪のまったき浄めにまで至り、いかなる罰も残存しないほどまでの効力を有しうる」。

この§1472には、トレント公会議の決議文より「DS1712-1713、およびDS1820を参照」との注記がある。特に後者は煉獄についての決議である。

以上の記述から理解されることは、罪に二種類があり、一方は「大罪」に相当し、他方は、いわば「小罪」に当たる、ということであろう。そして煉獄は、後者に関わるものなのである。

VII. 「代祷」（その1）

煉獄との関連で無視しえないのが「代祷」*suffragium*という概念である。これは上でもCCE §1032に引かれていたように、旧約聖書第二正典の第2マカベア書12、45（46）に初めてその観念が見られるものであり、「代祷」という訳語が定着している。§1032中に「参照せよ」との

指示が見える § 1371においては、「聖体祭儀における生贄は、亡くなった信徒たち、すなわち＜キリストのうちに亡くなったが、未だ完全なかたちでは浄められていない者たち＞のためにも捧げられる。それは彼らが、キリストの光と平和のうちにいることができるためである」に続き、アウグスティヌス『告白』(9,11,27)からの引用を挟んで、エルサレムのキュリロスの『秘儀教話』5、9-10から引用が行われる。

9. 「しかる後、われわれは死せる者たちについても思い起こす。まずは族長、預言者、使徒、殉教者についてである。これは、神が彼らの祈りと威光にあわせ、われわれの懇願δέησιςをも受け入れて下さるがためである。しかる後、亡くなった聖なる師父や司教たち、そして単にわれわれに先立って亡くなった者たちすべてについてわれわれは思い起こす。これは、聖にしても畏れ多き生贄が現前するときに、その懇願が捧げ向けられる靈魂にとって最大の喜びがあるものとわれわれが信ずるという理由による」。

10. 「さらにわたくしは、あなた方を範例によって説得したいと思う。というのも多くの人々が次のように述べるのをわたしは知っているからである。＜靈魂が、過ちを伴っているいないに関わらず、この世から解放された後に奉獻の際に思い起こされたところで、靈魂にとって何の益があるだろうか？＞と。(中略) われわれも、死せる者たちのために神に懇願δέησιςを捧げるなら、たとえ彼らが罪びとであっても、われわれは冠を編むのではなく、われわれの過ちのために剣にかかったキリストを奉獻するのであるから、必ずや彼らのまたわれわれのために、人間愛に満ちた神をなだめることになるのである」。

上記の9. にあっては、ここでの「懇願」の原語ギリシア語はδέησιςであり、これは明らかに、ビザンティン教会におけるイコノスタシス上での「デエシス」における意味合いと同じ文脈で用いられている。イコノスタシス上に描かれる族長や預言者たちは、前傾30度前後に身を傾けているが、この「懇願」は、主に対して行われる「執り成し」であり、彼ら族長たちが行う行為であって、われわれ生ける者が行う「代祷」とは向きが異なるものの、同じ語彙が用いられているのである。そして10. における用例は、これがわれわれによる「代祷」そのものであることを意味する。かくして、代祷とは双方向的に行われるものなのである。

上に引いたいくつかの箇所でも示唆されていたが、代祷は特にエウカリスティア(聖体祭儀)と密接な結びつきを持つ。聖体祭儀とは、キリストの体を構成する信徒相互の交わりに関する論であるため、煉獄篇は結局「キリスト身体論」つまり「聖体論」に直結すると考えられる。聖体論はキリスト教の東西において、少しく様相の相違を見せ、東方では聖体の置かれる場が十字架上に求められる一方、西方では最後の晩餐で奉獻されるキリストの体にその場が求められる(秋山2010: xi)。この問題意識を持続させつつ、次に「代祷」(suffragium)という語彙について、カテキズムのインデックスに挙がる項目を中心に検討を加えよう。

VIII. 「代祷」(その2)

以下で検討するのは、カテキズムより § 958、§ 1032、§ 1055、§ 1684～1690についてである。

§ 958 この直前の項目では「聖なる者たちとの交わり」について述べられている。これを承ける形で、ここでは「死者たちとの共同体」について語られる。「イエス・キリストのまっつき神秘的な身体における交わりを的確に意識しつつ、旅人である教会は、キリスト教の初期の時代から、亡くなった者たちへの記憶を大いなる敬虔さとともに培ってきた。そして亡くなった者たちが罪から解かれるように、彼らのために祈ろうという彼(ユダス・マカバイオス)の思いは、まことに聖にして真摯なものであった> (2マカ⁷ 12、46) ために、彼ら(死者たち)のために代祷をも捧げてきた。彼らのためなるわれわれの祈りは、彼らを助け得るのみならず、われわれのためなる彼らの執り成しをも有効なものとするのである」。

ここには、上でエルサレムのキュリロスに関して見たような、死者・生者間における祈祷の「相互通功」性が明確に記されている。

§ 1032 先に触れたように、この項目には、ヨハネス・クリュソストモス『第1コリント書説教』(41、5)からの引用が挙げられている(PG61、361b-c)。「それゆえ、われわれは彼ら(亡くなった人々)を援助し、彼らのための追憶を全うしよう。というのも、父親の生贄がヨブの子供たちを浄めたとすれば(ヨブ¹ 1、5)、すでに亡くなった人々のためにわれわれが犠牲を捧げる際に、彼らのために何らかの慰めが生じるかどうか、なぜ疑う必要があるのか。〈というのも神は、他の人々のために他の人々が何かすることを嘉するのが常なのだから。そのことはパウロも、次のように述べて明らかにしている。〈多くの人々のおかげでわたしたちに与えられた恵みについて、多くの人々がわれわれのために感謝を捧げてくれるようになる〉(2コリ¹ 1、11)〉。だから、すでに亡くなった人々を助けることに倦まないようにし、彼らのために祈りを捧げよう」。

なおヨハネス・クリュソストモスに関して、ダンテの『神曲』は、彼の名を天国篇第12歌137行で挙げている。東方の教父が言及されるのは珍しく、『神曲』の中では彼が、ディオニュシオス・アレオパギタへの言及(天国篇第10歌115行)とともにほぼ唯一の例外と言えるであろう。後者については、『神名論』を通じてトマス・アクィナスが言及するため、ダンテにも親しかったと思われるが、前者は、東方典礼において常用されるのがクリュソストモスの名を冠した次第であるということが、第2リヨン公会議を通じてダンテにも知られていたために登場するものと考えておきたい。

§ 1055 「<聖なる者たちの共同体>のために、教会は死せる者たちを神の憐れみに向けて奉獻し、彼らのために執り成しを捧げる。それは、聖体祭儀における生贄として最もよく表される」。

§ 1684から§ 1690までは、埋葬の儀に関する説明である。本論とはあまり関連しないが、初項の§ 1684についてのみ訳出しておこう。

「キリスト教的埋葬は、教会の典礼行為である。教会の奉仕は、一方で死者との有効な共同体を表現することを望み、他方で埋葬のために参集した共同体がこの典礼に参加することと、この共同体に永遠の生命を告げ知らせることを望んでいる」。

以下、§ 1685「埋葬の持つ復活祭的特質」、§ 1686「4つの主要な要因とは」〔これは§ 1687「共

同体による挨拶」、§ 1688「言葉の典礼」、§ 1689「感謝の祭儀における生贄」、§ 1690「別れの儀」の4つを指す] へと記述が続いてゆく。

IX. 煉獄篇における祈り

ダンテに戻ることにしよう。ダンテ『神曲』の煉獄篇について、われわれはとかく、地獄篇からの連続性の許に置いてしまいがちである。地獄篇においてダンテは、先導者のウェルギリウスとともに、生前における罪の大きさのために厳しい責め苦に遭う登場人物たちに、時には同情するものの（たとえば第5歌でのパオロとフランチェスカに対してなど）、基本的には「視線をやりながらその傍らを通り過ぎる」といった態度をとる。われわれがもし、これと同じ態度で煉獄篇を読むなら、同じく生前に犯した罪の償いを果たしている登場人物たちに対して、ダンテがウェルギリウスとともに（あるいはスタティウスを加えて）、その傍らをやはり漫然と通過してゆくような錯覚に陥りがちである。

しかしながら、「煉獄」は「地獄」とは異なり、その枠組み・舞台設定自体が、既述のように、神学的に見て生者と死者との相互通効の場であると言える。言わば地獄が「対岸の火事」に近かったとすれば、煉獄とは、生者が積極的にそこに参与してゆくべき場所なのである。

さて『神曲』の「煉獄篇」には、主にラテン語で記された祈りが、計7つの環道の各々に配されている。それらの祈りについてはいずれも、ほぼ古今東西の聖務日課書の中での位置を確認することができる。煉獄の前に位置する「前煉獄」での祈りをも含めて、これらを以下に列挙してみることしよう。なおカッコ内に付記したのは、ダンテ当時用いられていた聖務日課書に近いと思われる『ローマ典礼日誦書』（*Breviarium Romanum* 〈略称BR〉1910）のどの部分にその祈祷文が見られるかについての注記である（以下〈 〉内の数字は「第×歌・第×行」を表す）。

・前煉獄

〈5、24〉詩編51、1「主よ憐れみたまえ」。

これは主日・日曜日の「讃歌」冒頭で唱えられる詩編である（BR：46）。また現在でもなお、痛悔の秘跡が与えられる際に、必ずあわせて用いられる祈祷文である。

〈7、82〉「サルヴェ・レジナ」（恩寵憐れみの母）。

1時課、3時課、6時課、9時課の際に交唱（Antiphona）として唱えられる（BR：25-26）。

〈8、13〉「一日の終わりに」。

アンブロシウス作の讃歌と伝えられる。1日7回の祈祷より成る聖務日課の最後に行われる「終禱」（Completorium）の中の祈りである（BR：23）。

〈9、140〉「テ・デウム」。

これもアンブロシウス作と伝えられる。従来は朝課の最後に歌われるとされたが（BR：6）、典礼改革後の現在のシステムでは、「読書」と呼ばれる①聖書朗読と②教父文献からの一節の朗読より成る聖務日課において、その最初に行われる祈祷である。

〈10、44〉「わたしは主のはしため」。

これは『ルカ福音書』1、38に見え、大天使ガブリエルの受胎告知に対する聖母の回答と祈りである。そしてこれ以降、「煉獄の山」の本体部に入って以降の祈りが見られる。

・第1〔高慢〕

〈11、1-24〕「主祷文」(イタリア語)。

ダンテは「主の祈り」に関して、福音書に載る原形(マタイ6、9-13; ルカ11、2-4)とは異なり、長文のイタリア語によるパラフレーズ文を掲載している。ここではこの祈祷句が、7つの罪全体に対する総括的浄めの意味において、またイタリア人に広く「主祷文」が普及するようにとの思いのもとに捉えられていると考えたい。

〈12、110〕「真福八端」(霊において貧しき者)

これ以降、罪の浄めのために、7つの罪のうちの3つまでが「真福八端」からの引用による祈祷文によって占められている。この「真福八端」は、ビザンティン典礼にあっては、聖木曜日の晩課と合体した聖バジル典礼の中で、受難の福音書朗読(計12個)のうちの第6福音朗読の後に唱えられる(秋山2010: 158-220)。聖木曜日はキリストが聖体の秘跡を定めた日だとされている(なおこれは共観福音書の伝承によるものであり、ヨハネ福音書ではこの制定の部分が「弟子たちの足の洗足」によって占められている。この経緯については稿を改めて論ずる必要がある)。また日々の東方聖務日課の中では、6時課に続いて行われる「正午の祈り」の中で、この「真福八端」が唱えられることになっている。また先述の「グレゴリウス典礼」の中でも、第9時課に接続する聖体祭儀の中で唱えられる(秋山1999: 47; 祈祷システムにおける「真福八端」についてはIvancsó 1999: 291)。

まず「霊において貧しき者」はマタイ5、3に出るもので、「真福八端」の第1であり、「天の国は彼らのものである」と結ばれる。「霊において貧しき者」は、自らを恃む「高慢なる者」に対立する。

・第2〔嫉妬〕〈15、38〕「真福八端」(憐れみ深き者)

「憐れみ深き者」はマタイ5、7に出る。「その人は憐れみを受ける」と結ばれる。「嫉妬」に対立する神学的徳とは「憐れみ」に他ならない。

・第3〔憤怒〕〈16、19〕「神の小羊」(平和の賛歌)

この句は、東方典礼において「プロスコミディア」(聖体の準備)部において唱えられる。もとより、聖体とは「神の小羊」たるイエス自身である。ローマ典礼にあっては、聖体拝領前の祈祷句とされている。したがってこれはビザンティン・ローマ両典礼の信徒からの「与かり」の可能性を拓くものと言えるだろう。憤怒に対立するのは、小羊キリストに基礎づけられた和合である。

・第4〔怠惰〕〈17、68-69〕「真福八端」(平和をもたらす者)

「平和をもたらす者」はマタイ5、9に出る。「その人は神の子と呼ばれる」と結ばれる。怠惰と本質的に対立するのが、積極的な働きによる平和の招来である。

・第5〔貪欲〕〈19、73〕詩編119、25「わたしの靈魂は塵にまみれている」。

マッタリアの注釈によれば「貪欲な者の靈魂は、地上的な富・財産に執着し、そこから離れることができない」の意だとされる(Mattalia 1975: 348)。月曜日の晩課で唱えられる(BR:

89)。煉獄篇第19歌が復活の月曜日に当たる位置にあるのであれば、ローマ典礼上でこの祈祷文が用いられる曜日まで意識しつつダンテが詩作したと推論できそうであるが、火曜日の早朝に位置する計算になるため、おそらくそこまで正確には考えられていないようである。

・第6〔暴食〕〈23、11〉詩編51、17「主よ、わが唇を開きたまえ」。

マッターリアの注釈によれば「唇にとっては、食べたり飲んだりする用途にではなく、神を賛美するために用いることこそより優れた用い方である」とされる（Mattalia 1975：412）。この祈祷文は、総じて祈祷聖務の冒頭に唱えられる句である（BR：1）。口の用途としては、神への賛美こそ最も神意に適う。

・第7〔邪淫〕〈25、121〉「至高なる寛容の父よ」（Summae Parens clementiae）。

元来聖アンブロシウスに帰せられる賛歌であったが、朝の賛歌に取り入れられ、土曜の朝課において唱えられるものとしてよく知られている（BR：190；209）。邪淫の念に対立するのは、天の父に範を仰ぐ寛容の徳である。

以上これらは、いずれもミサや聖務日課の中で歌われる聖歌であることが明らかとなった。第2ヴァティカン公会議（1962-1965）以前には、ミサや聖務日課は、ラテン語で執り行われることしかありえなかった。トスカーナ方言を文学語に昇華させることを第一の課題としたダンテとて、この点に関しては何ら疑問を抱いていなかったのである。結局煉獄とは、聖体祭儀と中心とする場での自己犠牲的相互奉獻行為を通じて経験すべき時間であると言えるだろう。

X. 煉獄に見る7つの「小罪」

前節で見たように、特に煉獄の山における祈りには、東方典礼の聖体祭儀にあって重要な「真福八端」からの祈祷句が多く、『神曲』が東西双方の神学に通じる面を持つという点が注目された。

以下では、煉獄で滅却すべきものとされた7つの「小罪」に関して、現ギリシア・カトリック教会の教義に照らし、ハンガリーの同教会共同体の祈祷書『主を褒め称えよ！』（Dicséjétek az Urat! 2009）に載る解説を参照することで確認したい。ギリシア・カトリック教会のカテキズムがまだ十分に整備されていない中で、同書には簡便な教義解説があり、大いに注目に値する。また、ハンガリーのギリシア・カトリック教会は第2ヴァティカン公会議以前、ビザンティン典礼を執行するために、その公認典礼用語として、近隣中東欧諸国が教会スラヴ語を用いていたのとは異なり、古代ギリシア語を奉じていた。これは、当時ローマ典礼教会が、ミサ執行のためにラテン語のみを認可していたのと同様の経緯に基づく。彼らハンガリーのギリシア・カトリック教会は、ある面においてベッサリオンの衣鉢を継ぐ直接の後継者と言えるかも知れない。

さて『主を褒め称えよ！』951頁には、7つの主たる罪として、

Kevélység高慢；Fösvénység吝嗇；Bujaság邪淫；Irigység嫉妬；Torkosság暴食；Harag憤怒；Jóraló restség怠惰

が挙がっている。ここにダンテ『神曲』煉獄篇での順序を重ねるならば、

1 高慢；5 吝嗇；7 邪淫；2 嫉妬；6 暴食；3 憤怒；4 怠惰

となる。掲載の順序は異なるものの、これら「煉獄」に載る7つの「(小)罪」の内実に関しては、ダンテと現ギリシア・カトリック教会とは完全に一致している。ダンテ以来700年以上の時を経ても、そこに変化は認められない。神学的に見るならば、『神曲』の中で現代に最もよく通ずるのは「煉獄篇」だと言えるかも知れない。一方、上で参照してきたローマ典礼教会のカテキズムの方には、以上のように罪を「7つ」と定めてその解説を記すといった部分は見当たらない。その意味で「煉獄」の観念が伝承されているのは、ローマ典礼教会のほうではなく、むしろビザンティン典礼教会の方だとすら言えるであろう。

XI. フェッラーラ・フィレンツェ公会議 (1438-1439) より

さて本稿冒頭で、古典文献学はベッサリオンによってその素材をもたらされたということを指摘した。一方神学的教義から言えば、ベッサリオンに随う少数派は「合同教会」と呼ばれる。古典学の流れの上にダンテを置こうとするなら、合同教会の教義とダンテがいかに織りなすかを検証することは有効な手続きとなるだろう。上の一節で確認したダンテとギリシア・カトリック教会の間での「(小)罪」の一致という点は、十分にその一例となりうる。そこでいま一度、ベッサリオンの定めた方向性を確認する必要があるだろう。ベッサリオンの活躍した公会議として、フェッラーラ・フィレンツェ公会議の内容を確認しておこう (以下Petit-Hofmann 1969 : 1-12)。

この公会議では、「煉獄」というテーマをめぐる、事実上「煉獄の火による浄化の有無」という教義の真偽について議論が行われた。同公会議には、ドミニコ会士のファン・デ・トルケマダ枢機卿 (1388-1468) のほか、ジュリアーノ・チェザリーニ枢機卿 (1398-1444) が参席していた。ギリシア教会の使節団に対し、神学的議論の提題を行ったのはこのチェザリーニ枢機卿である。そして彼の草稿中に引用されるギリシア教父文献をラテン語に訳し、さらにその草稿全体をギリシア語に訳したのが、先に触れたトラヴェルサーリであった。

チェザリーニの演説は、煉獄に関わる聖書箇所提示で始まる。I は2マカバイ12、45 (46)、II はマタイ12、32、III はパウロ1コリント3、13-15からの引用であり、本稿でもすでに言及した。

IV はミサの中での死者への祈り、V はこの件が聖人たちの共通認識となっていることへの言及、VI は第5公会議すなわち第2コンスタンティノポリス公会議 (553年) に関してであり、その中に引かれる教会教父たちがVIの内実をなす。

最初に、VI2はアウグスティヌスから引かれる。まず偽書「使徒の言葉・第1コリント書11-15について」の引用が行われ、次いで『神の国』21巻13章から、さらに同巻第24章から引かれるが、これに関しては省略する。西方教父に関しては、アウグスティヌスからの引用が多くを占めるが、本稿で中心に扱っているギリシア教父たちによる煉獄認識に比して、アウグスティヌスの理解のうちに、特に目立って異質な点は見られない。もとより公会議の決議は、西側の教会聖職者たちによって主導的に行われている。したがって、以下のラテン教父関係についても総じて省略することにする (アウグスティヌス「パウリヌスに宛てて：埋葬について」から2か所、次いで偽書から2か所と説教172番；VI3はアンブロシウスによる「コリント第1書」への注解)。

VI4では大グレゴリウスの「対話」4、39が引かれるが、この関連の一節はすでに訳出を終えた。ラテン教父大グレゴリウスがビザンティン典礼において占める位置については先述してある。

VI5よりギリシア教父関連の典拠提示となる。まずビザンティン典礼の『祈祷書』(Euchologion)より3カ所にわたり、バシレイオスによる祈祷句が引かれる。1)「あなたに願うわれらに耳を傾けたまえ。あなたの僕たち、先に眠りに就いた師父たち、われらの兄弟たち、そのほか類縁の者たち、信のうちにあってわれらに先だった者たちすべての靈魂を憩わせたまえ」。2)「あなたに願うわれら、あなたの卑しき嘆願者たちに耳を傾けたまえ。あなたの僕たち、先立って光の場所・緑なす場所・休らいの場所、そこに痛みも苦しみも嘆きもない場所に眠る者たちの靈魂を憩わせたまえ。そして彼らの霊を、義しき者たちの、平和と赦しの幕屋に立たせたまえ」。3)「わたくしは、たとえ蹟きの痕跡を帯びているとしても、言葉に尽くせぬあなたの栄光の似像。主よ、あなたの被造物を憐れみたまえ。あなたの寛容によってわたくしを浄め、願い求める祖国をわたくしに与え、再び樂園の住人となさせたまえ」。

続いてVI6では、ニュッサのグレゴリオスから事実上二箇所が引かれる。まず一つめは『靈魂と復活について』(97c-100a)である。「というのわたしの考えでは、罪を犯した者たちに対して神が沈痛な心境をもたらすのは、憎しみのためでも、悪しき生に報復するためでもない。神はこれを予知していて、何であれ自らの恩寵によって誕生に至ったものをすべて、自らの許に引き寄せる。むしろ神は、あらゆる至福の泉なのであり、より高次の目標を掲げて靈魂を自らの許へと牽引するのである。〈こうして引き寄せられる際に、辛い心境が必然的に伴うのである〉。またちょうど、黄金に混ざった質料を、火をもって浄めようとする者は、夾雑物を火で溶かすばかりでなく、純粋な部分をも夾雑物に溶かし込み、夾雑物が消尽されるまで放っておくことがまったく必要である。ちょうどそれと同じように、眠ることのない火によって悪が焼尽される際には、その火と一体となった靈魂もまた火の中に置かれ、散りばめられた不法的・質料的・夾雑的な部分は、永遠の火によって焼かれ消尽されることが不可欠である」。ここには「夾雑物を焼尽する火」という観念が見られ、事実上「煉獄の火」に重なる。

もう一か所は『死者たちに与う』(524b)である(GNO IX、54、11-20)。「かくしていれば、本性には能力が備わっていて、悪が生じないようにできている。神の智慧はこの先見性を見出し、人間に対しては、欲した悪を享受するため、そうなることを欲した事どものうちに留まらせる。かつ、どのようなものから解放されたかを試みによって学び、自ら願望を通じて当初の至福に向かって再度駆けさせ、情動に満ち非合理的なあらゆるものを、いわば何か重しのように削ぎ落とさせる。それは、あるいは現生において意志集中と愛智を通じて浄められるか、もしくはこの世からの移住の後、浄めの火の炉によるかするものである」。ここにも「浄めの火の炉」という表現があり、「煉獄の火」と通底することが注目される。

そしてVI7は偽ディオニュシオス・アレオパギタ『教会位階論』第7章4である。「くしかる後、神的な聖職者は、亡くなった者のために聖なる祈りを捧げ、祈りの後でその聖職者自身が、彼に挨拶をし、それに続いてそこに臨席する者たちも皆挨拶をする>に関して。神に発する善性に満ちた祈りは、亡くなった者が人間的な弱さのために犯した誤ちをすべて解く。そしてその

物故者を、光に満ちた場所に住む人々の群れに属させ、そこに痛みも苦しみも嘆きもない、アブラハム・イサク・ヤコブの懐に入らしめることが必然である」。

続いてVI8でエピファニオス『パナリオン』3,75,8-9が、VI9でダマスコのヨハネ、VI10でキュロスのテオドレトスが引かれるが、これらについては省略することにしよう。

以上、煉獄の観念が固められた時期の公会議としてフェッラーラ・フィレンツェ公会議の場合を取り上げ、その内容を探った。それらの内容は、第2リヨン公会議における議決を深化させたものであって、実質的に異なるものではない。ダンテの『神曲』が第2リヨン公会議を踏まえたものであるとすれば、ベッサリオンに発する西洋古典学とギリシア・カトリック教会の神学にも、『神曲』が十全に受容され得ることは明らかであろう。

XII. 煉獄における諸シンボル

では『神曲』煉獄篇に、煉獄をめぐる神学的な特徴が既に現れているのかどうか、改めて確認しておこう。まずは、すでに言及したように、新約聖書以来「煉獄の火」として記されてきたものが挙げられよう（1コリ3、15；1ペ1、7）。

1) 〈火〉 煉獄篇第27歌には「血の殉教を思わせる赤い火」が現れる（46行）。この火は「煉獄の火」を容易に想像させる。この炎は第25歌の112行から登場する。第25歌は第7環道、すなわち淫乱者たちの浄めの場であり、第26歌も同じく第7環道・淫乱者たちの登場する域である。第27歌も第7環道であるが、ダンテは、淫乱者たちの置かれている炎の中に歩み入るよう招かれ、詩人の抵抗も絶望的で、ウェルギリウスの圧力が勝利を収める（第27歌49行）。この環道の最後の階段の上で彼らは一夜を明かし、太陽が再び昇り、地上の樂園に接岸すると、ウェルギリウスは荘厳で控えめな言葉とともに、自らの任務が終了したことを宣言する、という流れになっている（第27歌115-117行）。

このように、淫乱とは無縁なダンテも、この煉獄の炎を被るよう強いられる。そこには「煉獄の火」という教義が伏在していよう。ダンテは新約聖書に現れる「浄めの火」に基づき、後のフェッラーラ・フィレンツェ公会議にも通ずる「煉獄の炎」のイメージを打ち出し得たのである。

ここで、前節に挙げたギリシア教父たちの原典からの引用の中で、ニュッサのグレゴリオスの場合に注目してみたい。ニュッサのグレゴリオスは、現代における古典学の刷新（いわゆる「第3のヒューマニズム」）に寄与したウェルナー・イェーガー（1888-1961）が、特に後半生をその校訂と研究に捧げた教父である。グレゴリオスのうちには「煉獄」ないし「煉獄の火」に通ずる神学が認められた。だとすれば、ギリシア教父たちから東西教会合同の公会議を経て現代における古典学へという流れのうちに、ダンテを位置づけて考えることができるだろう。

「煉獄の火」に続き、煉獄篇の後半に位置する「地上の樂園」には、聖書そのもののアレゴリー、および「十字架」をめぐるアレゴリカルな表現が認められる。

2) 〈聖書〉 煉獄篇第29歌は、聖書の緒論である。82-87行には「24人の長老」が登場するが、これは黙示録4、4に先行用例を見出し、旧約聖書を象徴するという解釈が通説になっている。

もっとも煉獄篇第20歌で『マカバイ記』のヘリオドーロスが登場することからわかるように、ダンテは当然のことながら旧約聖書続編を知っている（したがって既述の「代祷」をめぐる第2マカベア書についても知悉していたであろう）。24という数字について、イタリア語の注釈には「旧約聖書を構成する諸書の数を象徴する」ふうの注記が見えるが（Magugliani 1997 : 400）、ヘブライ語旧約聖書の諸書を単純に足しても合計24書になるわけではなく、続編を加えればさらにその数は増すため、別の寓意的解釈が必要であろう。『歴代誌』上24、1-19に「祭司の組織」としての「24のくじ」が見え、これが旧約を象徴すると考える方が妥当性を有する。ダンテにとって旧約とは「書物」に象徴されるキリスト到来以前の契約なのではなく、むしろ祭司組織に象徴されるシステムだったと考えられる。

3) 〈十字架〉 一方、第29歌108行にはグリフォンが登場する。このグリフォンはイエスを象徴するとされる一方（Magugliani 1997 : 401）、煉獄篇第32歌には十字架が登場する。この十字架は、同歌34-48行で「善悪の木」を、49-51行で「教会を正義に結びつける十字架」を、52-60行で「人類に平和をもたらす恩寵、すなわちイエスの流した血」を象徴する。そして次の煉獄篇第33歌には、「十字架の下にたたずむマリアのようだ」との比喩のもとに、ベアトリーチェが登場する（6行）。

かくして『神曲』において、十字架は結局、地上の楽園に立っていることになる。ダンテはここから天国（篇）での旅へと旅立つのであり、先にグリフォンが登場したことは、ダンテによる天界での旅を予示・先導する意味において捉えられよう。ここには、十字架こそ地上界と天界とを結ぶ靱帯であるという理解を読み取ることができる。

一方、第2リヨン公会議やフェッラーラ・フィレンツェ公会議での決議事項を参照して明らかになったように、煉獄とは結局、生ける人々・亡き人々がともに集う聖体祭儀の場を体現する世界であり、そこは相互通功としての「代祷」が有効な場であった。東方典礼の考え方によれば、聖体祭儀の行われる場とはキリストが懸った十字架上で行われるものに他ならない（秋山2010 : 154-157）。

以上のような「地上の楽園」におけるいくつかのシンボルが意味する世界をまとめるならば、煉獄に冠する「地上の楽園」にあっては、「聖書テキストから十字架上のキリストへの収斂」が意図されていると読み取ることができるだろう。そして「煉獄篇」全体が、このように「地上の楽園」に至る、十字架に向けて刻まれる旅程であったと考えることができるだろう。

XIII. 天国篇・地獄篇の理解に向けて

本稿で検証してきたように、ダンテの『神曲』は第2リヨン公会議以降の成立になるため、東方ビザンティン典礼の神学的背景を基に読むことができる。煉獄の山が、復活の月曜日・復活の火曜日とともに経過するという構造は、「煉獄篇」全体が、東方での理解に根差す「十字架上での聖体祭儀」とともに進行するという仮説を有効なものとする。ビザンティン典礼において復活の月曜日・火曜日は、復活の主日と同様、主日扱いである（秋山2010 : 287-342）。一方煉獄の

山の各「環道」には、ミサの中で執り行われるラテン語聖歌が配されている。「代祷」が有効であるとすれば、その祈禱を捧げられている当の死者たちもまた、祈っているということに他ならない。ダンテが描き出す「煉獄篇」の光景は、主としてこちらの側に焦点を当てたものである。

東方典礼の典礼空間は、基本的にキリスト再来の時点である。たしかに『神曲』では、復活後の火曜日以降、地上の樂園を過ぎれば、時間的経過が全く記されなくなる。「天国篇」はおそらく1日間での時間経過を要するということになるだろうが、もとより月天以遠の天界にあっては地上での時間観念は適用され得ず、時間の観念が失われるという表現が正確であろう。

一方地獄篇は、基本的にキリスト以前の世界である。もっとも旧約時代の人々は、キリストが復活の前に冥界下りを果たし、自らの復活とともに彼らを引き出したため、地獄界に旧約の民はすでに見当たらない。残されているのは、ギリシア・ローマ世界の民のみであり、彼らの中で「詩聖」と呼ばれるような人々が「リンボ」(辺獄)と呼ばれる域にいる(第4歌)。ダンテが「異教」とされたギリシア・ローマの古典古代世界に「予型論的解釈」を適用することで、これを聖なる時代世界にしようとしたという点は、しばしば指摘されている点である(原2014a: 592など)。

以上をまとめると、煉獄篇は、地獄篇での他者見聞と、天国篇での神的合一との中間にあって、十字架に収斂する秘跡体験を経る空間であったということになるだろう。『神曲』が持つ地域上・時代上の普遍性は、特に第2リヨン公会議での議決をおそらく十二分にダンテが知悉し踏まえたことに起因すると考えられる。それは現代のわれわれが、ヒューマニズム的な観点から古典古代・教父時代の文献を通覧する上で、『神曲』が格好の指針をなすことを裏書きする点でもある。

XIV. 結

本稿では、第2リヨン公会議からフェッラーラ・フィレンツェ公会議までを視野に収めることで、『神曲』が、神学的に現代東西にまで通ずる作品であることを実証しえた。その意味でも『神曲』は、ダンテ自身が胸を張るごとく(地獄篇第4歌102行)、ベッサリオンの収集に負うギリシア古典、ホメロスに始まる「西洋古典」の偉大な列のうちに数え挙げられるべき作品だと言える。

いまここに、ウェルギリウスやスタティウスが地上の樂園の直前まではダンテと行動を共にし得たという点を考え併せたい。煉獄が聖体祭儀の現場をよく表現する場だと理解するならば、リンボにいた異教世界の聖者たちは、聖体祭儀の直前までは参与しようということを意味するものと考えられよう。これはある意味で、「代祷」の及ぶ範囲をダンテが象徴的に拡大した、とも捉えられうる一面であろう。『神曲』は、イタリア文学ないし世界文学としてのみならず、現代神学にもなお幾多の意義を提供し続ける古典作品なのである。

参考文献

- 秋山学1999「ビザンティン典礼における聖体礼儀の諸相とその神学 —聖バジル、聖グレゴリオス、聖クリュストモスの典礼—」、『古典古代学を基盤とした「東方予型論」の構築と可能性をめぐる研究』（平成18～20年度科研費補助金基盤研究（C）成果報告書），21－69頁。
- 秋山学2011『ハンガリーのギリシア・カトリック教会 —伝承と展望—』創文社。
- イエディン、H. 1986『公会議史 ニカイアから第二ヴァティカンまで』梅津・出崎訳，南窓社。
- 岩倉具忠ほか1985『イタリア文学史』東京大学出版会。
- 原基晶2014aダンテ・アリギエリ『神曲 地獄篇』講談社学術文庫。
- 2014bダンテ・アリギエリ『神曲 煉獄篇』講談社学術文庫。
- リーゼンフーバー、K. 2003『中世思想史』平凡社。
- Akiyama, Manabu 2016 “Il significato misterioso della profezia nelle Omelie su Ezechiele di Gregorio Magno” *Origeniana Undecima*, 63-74. Anders-Christian Jacobsen Leuven, Peeters.
- Denzinger, H., Schönmetzer A. (edd.; DS) 1976 *Enchiridion Symbolorum: Definitionum et declarationum de rebus fidei et morum*, editio XXXVI, Barcinone - Friburgi Brisgoviae – Romae.
- Ivancsó, István 1999 *Görög katolikus liturgika*, Nyíregyháza.
- Ivancsó, István 2000 *Görög katolikus szertartástan*, Nyíregyháza.
- Magugliani, Lodovico (note di) 1997 *Dante Alighieri, La Divina Commedia: Inferno-Purgatorio-Paradiso*, Introduzione di Bianca Garavelli, Libri S. p. A.
- Mattalia, Daniele 1975 *Dante Alighieri, La Divina Commedia: Inferno-Purgatorio-Paradiso*, Biblioteca Universale Rizzoli.
- Naldini, Mario (a cura di) 1984 *Basilio di Cesarea, Discorso ai giovani*, Nardini Editore, Firenze.
- Petit, L./ Hofmann., G. (edd.) 1969 *De purgatorio disputationes in concilio florentino habitae*, PIO, Roma.
- Reynolds, L. D. / Wilson, N. G. 1991 *Scribes & Scholars*, Oxford.
- Breviarium Romanum (BR)* 1910, editio xiv juxta typicam, amplificata xii, pars hiemalis-verna-aestiva-autumnalis, Ratisbonae.
- Catechismus Catholicae Ecclesiae (CCE)* 1997, Città del Vaticano.
- Dicséjétek az Urat!* 2009 *Görögkatolikus szertartású énekeskönyv*, Nyíregyháza.